

# 土曜 ライフ・楽しむ

## 生きること＝ものが増えること？

### わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利



突然ですが事務所を引っ越しました。これもコロナの影響と呼べるかもしれません。種々の事情があります。

コロナ禍の真ただ中では、物件選びもままならず往生しました。特に困ったのは不用品がたくさんあったことです。「また使うかもしれない」とか「思い出深く捨てられない」といったものがあるっていました。

知り合いから「事務所を移転するので、使いたいものがあれば持っていくといいぞ」と声がかかればホイホイもろってきました。例えば棚をもらうと、収納スペースが広がるのでまた物が増える、ということを繰り返しました。

20年というのはそれなりに長いもので、その間の歴史というかヘドロもどきがたまりにたまっていったのです。

電話番号を変えないことと価格面を条件にして不動産屋さんを探してもらった結果、前事務所の4分の1ほどの広さの部屋、大家さんにお叱りを受けるかもしれないが昭和の匂いのする集合住宅にお世話になることにしました。

静かな場所ですが、上の階に住む小さなお子さんの走り回る音が聞こえ、人のいる気配に何かほっとするものを感じています。同じ区内とは言え、これまであまりなじみのない場所、まだ借りてきた

猫の心境です。コロナが終息すればこの地になじむようになると思ういます。

40年ほど前、東京の会社に転職しました。入社の際に届いた社宅の案内図を手に、地下鉄丸ノ内線東高円寺駅で下車。出口のすぐそばに道路がしっかりと書かれています。が、見つけた道は車1台がやっとの、まるで路地です。

この路地じゃない、と通り過ぎるも蚕糸試験場の塀が長く続くばかりでそれらしい道はありません。半信半疑で戻ってその道を行くと曲がりくねった先に目指す社宅が出

現。北海道と異なり、除排雪の苦労がないので狭い道でもいいのでしょうか。

しかし、途中の電信柱や建物の壁に車がこすった跡を見つければ、こちらの人も苦労しているんだとなぜかうれしかったものです。住めば都と言いますが、好奇心いっぱい歩き回り、すぐになじむことができずました。

狭い社宅でしたが、物が少なくそれほど不自由はしませんでした。もしかしたら生きることなのかもしれない。このたびの移転を機に、会社も自宅も身軽にと思いましたが、それはまだ道半ばです。

今回が100回目のコラムとなりました。その節目と再出発とも言える移転が重なりました。記念に何かかっこいい話をお聞きしたいのですが、こんな話題ですみません。